

秋彼岸

—受賞作品概要

北原文雄

1

黒豆は三日前から炊きはじめていた。豆はすでにやわらかくふくらんで、味加減もよい。庄一は朝起きると、ふたたび黒豆をとろ火で炊きだした。

大きい鍋に八方ダシをたっぶりつくつてある。煮炊き用のベースとしていろいろな料理に使う。昆布に干し鰹を削りこんで、夕べしっかり煮詰めた。

庄一は料理の品書きを見た。品書きは冷蔵庫の扉に貼ってある。黒豆のほかには、煮染め、ヒジキ、焼き魚、天麩羅、酢の物、サラダ、刺身、鳥の唐揚げ、巻きずし、茶碗蒸し、吸い物、香の物の十三品である。

庄一が若かったころの墓参は、二十数人が常だった。結婚したところ、盆・正月・両彼岸の四回に、集まる親族の多

さに妻は驚いた。

結婚して三年目、代替わりしたのだから、盆と正月は遠慮させてもらうわと、叔父叔母のほうから辞退した。叔父叔母が庄一宅へ来るのは、春秋の両彼岸だけとなった。いまでも彼岸参りをできるのは、末の叔母一人になった。

庄一の姉や弟の子どもたちも成人して来なくなって久しいが、連れ合いも亡くなって、夫婦で来るのは弟夫婦だけになった。息子夫婦、娘夫婦の子どもが一人ずつしかいないことが、彼岸参りの客をいつそうさびしくしていた。

庄一は朝の六時から台所で料理をはじめた。夕べ水にひたしておいた乾し椎茸をザルに移して水を切った。乾し椎茸は水をたっぶり吸いこんで、黒光りしてやわらかい。

椎茸は煮染め、巻きずし、茶碗蒸しに

な

「いつしよに行こうよ。もてないよ」

「わかった。ちよつと待って。ヒジキ用のイカを切り終わったら行くわ」

ヒジキにはイカと人参、蒟蒻、竹輪、アゲ、グリーンピースを入れて炊く。具の多いほうが孫たちはよろこぶ。辛みを控えるのがコツ。近年は幼い子どもに合わせ、塩、醤油、香辛料をひかえた薄味が中心になった。

天麩羅は嫁の実家からもらったタコとイカとアナゴを揚げる。野菜はすべて自家製でまかなえた。薩摩芋は昨日はじめて一株だけ掘った。玉葱と南瓜は倉庫にある。シシトウやオクラは冷蔵庫に入っている。畑からナスとピーマンをとってくれば、じゅうぶんだった。

妻と畑へ行った。今年の夏は暑かったが、彼岸がきて暑いが、陽ざしが強かった。畑は高台のほうにある。島の低山がくつきりと見えた。

「おとうさん、野菜をつくりすぎよ」

畑を眺めながら妻が言った。

と重宝に使えた。椎茸を鍋に入れて、砂糖、ミリン、醤油にちよつぱり塩を入れ、八方ダシをそそぎ、ガス台に載せた。

乾燥昆布巻き、ヒジキ、高野豆腐を水にひたして、里芋の皮むきをはじめた。時間のかかるものから煮炊きをするのが料理の常道である。里芋の皮をむいてから、蒟蒻を切ってひねり巻にした。

つくりすぎて残り物を何日も食べるのはたまらないから、十三人分を数えて料理する。十種の煮染めは、多くつくっても二十切れ以上はつくらない。

たとえば、高野豆腐は五個を水にひたす。煮染め用の高野豆腐は一個を半分になり、さらにそれを半分にすいて、四切れにするから、四個あれば足りる。一個は巻きずし用である。

「休みの日はゆつくり寝たいよね」
煮染めの品が半分くらいできたところに、妻が起きてきた。

庄一は料理をつくることは苦にならなかった。むしろたのしかった。料理をいろいろ考えていると、世の中のいやなことが忘れられた。

「あちこちにあげるから、ええね」

「あげるのはいいけど、手間がかかるのよ。何歳まで生きるつもり」

夕べの話にもどった。応えないまま、庄一は畑に入って、ナスとピーマンを数個ずつ缺で切って、妻のもつザルに入れた。アスパラも揚げるかと、隣の畝へ行って数本とった。トマトはサターントマトの大きいところを数個と、ミニトマトを三十つぶほどもいだ。

青シソが元氣よく繁っている。これは天麩羅にもできるが、酢の物、サラダ、刺身に使えるし、焼き魚、唐揚げの添え物や、吸い物に置いてもよい。巻きずしにも使える。青シソの香ばしい匂いが庄一の鼻をついた。

「ゴーヤチャンプルもつろうか」
「いいわよ。もうたくさん用意をしているんだから。隣のネギ、吸い物に使うからすこしとってよ」

「いや、焼き魚の鱻に、ネギをたくさん盛りつけて、ポン酢で食べるんや。ぎょうさん取つとくわ」
ネギをとって畑の畦にもどった。岸の

買ってきて冷蔵庫に入れてあるものや、畑のものを組み合わせ、なにをつくらうかと考えるのは、ぞくぞくするほどの魅力があった。料理は組み合わせ順列の問題だと、たのしみながらつくった。

できあがった黒豆を鉢に入れた。煮染めは高野豆腐、里芋、人参、牛蒡、椎茸、蒟蒻、巻昆布、竹輪ができていた。あとはイカを煮つけて、彩りにプロッコリーをゆがけばよかった。

——この八方ダシはええなあ、と庄一は大きな鍋のダシを覗いた。便利なしるものだとおもった。

「おとうさん、足りないものがある？」
息子嫁の実家は漁師で、タコ、イカ、アナゴを昨日もらったばかりだ。焼き魚に活きのいい鱻を買っておいだ。

「とくにはないな。刺身はタコ、イカに焼きアナゴを添えるから。マグロを食べたいのなら、アジか鯛を加えて五品や」
「わたしはマグロを食べたいから、買いに行ってくるわ」

「買いに行く前に、キュウリ、トマト、ナスとパセリ、青シソをとってきてえ

斜面に長く蔓を伸ばした南瓜が、まだた
くさん黄色い花を着けていた。

野菜づくりは、自分が農民の子だとい
うことを実感させてくれた。料理と同じ
く、浮き世のことから、しばし解放して
くれる。料理と農作業は庄一のよい息抜
きになった。

田圃の稲は黄色く熟れはじめていた。
妻も田圃を眺めていた。

「キミも島へ来たころ、鎌をもって稲刈
りをしたな」

「三年だけ。お母さんの生きている間」
妻が島へ来て三年目に母が亡くなった。

妻が都会へ逃げ帰らずに、島に住みつづ
けたのは、嫁姑との関係が蜜月時代で終
わったからだとも言えた。

去年の冬の畑の光景を庄一はおもひ浮
かべた。ヒヨドリにやられて、秋に種ま
きしたものが、定植したものが全滅した無
残な光景である。

「ことしはヒヨドリにやられないよう、
田植えの水引を畑に張るね。鳥は嫌って
寄りつかないから」

「そうなの？」

を軽くこね合わせて盛りつける。周囲に
ゆで卵を半分切ったのと、トマトをス
ライスしたものと、薄塩でゆがいたプロ
ッコーリを飾って仕上がりである。

——ふん、慣れたものだ、と庄一はサラ
ダの盛りつけを眺めた。いいあんなばい
鱈も焼けた。

「いい魚がないわ。お彼岸だからかし
ら」

「なにを買った？」

「マグロとサザエ」

「いいだろう。嫁は貝が好きだから」
妻の好きなマグロは大きな切り身だっ
た。鉄火巻きにもできると、すぐに冷蔵
庫へ入れた。だが、サザエは三個しか買
っていないかった。二人に一個でも六個は
いるだろうとおもったが、咎めなかった。

サザエは数合わせの添え物だから。
「吸い物に、アサリを買ってきたから」
と妻が言った。

「ばか、いまのアサリなんか食べられる
か。アナゴがあるやないか」

「酒蒸しにしよう。ネギを利かせて」

「野鳥は羽根を大事にするね。ふいに羽
根に触れるものがあると、近づかなくな
る。鳥は学習するからな」

——キミはまったく学習せんが、と声に
はださなかった。

妻は魚屋へ買い物に出かけた。ヒジキ
をこしらえてから、酢の物の準備にかか
った。タコはまだ生きていた。にゆるに
ゆると手触りは気持ちよいものではない。
沸騰した大鍋にタコを放り込んだ。

タコは全身をくねらせて、熱湯に浮き
沈みした。足や頭を悶えさせながら、軟
体を数回よじって力をつきた。赤く色づい
て動かなくなった。

タコの半分を酢の物用に薄めに切って、
酢に漬けた。残り半分のタコは刺身用と
天麩羅用に切って、サララップがけを
して冷蔵庫へ入れた。

もぎたてのキュウリをスライスして、
千切りにした青シソと混ぜ合わせた。ポ
ールに酢を入れ、少量の水を加え、砂糖
とミリンを入れて、さらに生姜をすりお
ろしてかき交ぜた。ひとつまみの塩を入

「ゴージャチャンプルは、つくらなくてえ
え、いうたんだれや」

「いいから、サーコが好きやから」
孫の名前をだして、妻は平然としてい
た。孫のよるこぶ顔が浮かんだ。娘夫婦
の子どもで、初孫だった。

「キミがつくれよ。わしは手いっぱい
や」

「はいはい、それくらい簡単よ」
妻はアサリの酒蒸しが好きなのだ。都
会生まれの妻は、食べ物に季節感が稀薄
だ。お盆を越えたらアサリは食べるな、
毒素が多い、というような認識がまるで
なかった。

2

十二時すこし前に娘夫婦がサーコをつ
れてやってきた。すこし遅れて息子夫婦
も孫のリーコをつれてやってきた。二人
の姉と弟夫婦は十二時十五分ごろに着い
た。八十八歳の元氣な叔母が、息子のヤ
スさんに車で送ってもらってきたのは、
すぐそのあとだった。

仏壇と床の間のある表座敷のテーブル

れるのがミソである。二十分ほど酢に漬
けていたタコを鉢に入れ、キュウリと青
シソを混ぜたのを端に盛りつけ、水で塩
落としをした生ワカメを添える。これで
酢の物一鉢ができあがる。

庄一は料理の品書きを確認した。品書
きには一品ごとに使う食材を全部書いて
ある。刺身なら魚の名称だけではなくて、
キュウリ、レタス、青シソ、生ワカメ、
パセリ、スタチ、ミニトマトなどと全部
書いていた。添え物、飾り物はメモをし
ておかないと、素早く仕事ができないか
らだ。

焼き魚にする鱈をオーブンに入れて焼
きはじめ、併行してサラダをつくりだし
た。サラダは畑のものが中心だった。レ
タスを水洗いしてから、手で小さく切つ
て、スライスしたキュウリと玉葱とオク
ラに、千切りにした青シソを混ぜ合わせ
る。深めの鉢を出して盛りつけ、そのう
えにチリメンを振りかけ、パセリのみじ
ん切りをまぶす。鉢の片方、四分の一く
らいに夕べ煮込んでおいたメーカーインジ
ヤガに、少量の塩コショウとマヨネーズ

を囲んでみんなが座った。子どもを入
てだが、十三人が並ぶと壮観だった。だ
が、この倍ほどの人が集まっていたころ
からくらべるとさびしいものだ。親族が
すくなくなるのはその家の滅びに近い。
ふと庄一はそんなことをおもった。

——いや、種族の滅びのときは、異常繁
殖するらしいから、平和で安泰な証左か
もしれないとおもいなおした。それにし
ても、金持ちと貧乏人は子だくさんでは
ないか、ともおもった。金持ちと貧乏人
の血筋が栄え、中途半端な人間の血筋が
絶えていくのか。中間層が激減している
この国の姿に似ているとおもった。

「すごい、ジイジが全部つくったの」

六歳のサーコが訊ねた。おとなたちは
頷いた。そうよ、ジイジがつくったんだ
よと、娘がサーコに教えていた。

「ジイジ、スゴイネ」サーコに合わせて、
三歳のリーコも言った。

「では、乾杯をしましょう。今日はよく
お参りくださいました」

庄一は目を細めて孫たちを見た。こう
いうことはあってもいいのだと、自分に

言い聞かせた。長年まじめに生きてきた、ご褒美みたいなものだ、庄一はくつろぎのひとつに身をゆだねた。

二つ繋げて置いたテンプルには、黒豆煮染め、ヒジキ、酢の物、サラダの鉢物と、鳥の唐揚げ、巻きずしの皿がある。アサリの酒蒸しは、妻が座る位置にきっちり置かれてあった。

巻きずしは太巻きにしようとおもっていたのだが、子どもの食べやすいように、全部細巻きにした。イカ巻き、アナゴ巻き、キュウリ巻き、タマゴ巻き、高野と椎茸の合わせ巻きに、妻が買ってきたマグロを鉄火巻きにした。銘々に出したのは、鱻の焼き魚と、刺身の五点盛り、天麩羅の十一点盛りだけだった。

「兄貴、これうまいな。どこで勉強したんや」弟は鱻の塩焼きのことを言った。「これ、この前に行ったあそこですね」

娘婿が庄一に言った。
七月に暑氣払いをしよう、娘夫婦と両家の父母とサーコの七人で夕食会をした。その旅館で出された鱻の塩焼きがう

まかった。それを真似たのだ。

塩をまぶして焼いた鱻を皿に載せてから生姜をすりおろし、ネギをたっぷり盛りつける。それを地元産で有名なボン酢タレで食べる。じつにうまい。

「ジイジのつくったの、おいしい」とサーコが言った。「オイチイネ」とりーこもサーコの真似をした。

「ショウサン、若いときから姐さんの手伝いをよくしていたからな」

叔母がにこにこしながら言った。

庄一が物心ついたときから、叔母は盆や正月、春秋のお彼岸には顔を出して、むかしは年に四回しかゆつくり里帰りができなかった。夕方まで兄弟姉妹でお喋りをして帰った。夕食を食べることはなかった。けっして泊まることもなかった。それが実家の嫁にたいする気づかひだったと、庄一はとらえていた。

「おとうさんは、食べた料理を再現できるから。寿司屋で、鰻の湯びきを食べるでしょう、その梅肉の味を覚えていて、家の梅干しを使って梅肉をつくるのよ。それがけっこうな味で」

「食べたらわかるやろ。まったく学習しない人もいるがな」

庄一はあきらかに妻を指して言った。そんなん、できへんわ、と何人かの女が言った。

「情けない女たちだ、とは言わなかった。料理のうまさは頭のよさのバロメーターや、人間食べるものに手抜きしただら終わりやぜ、というのが庄一の信条だった。手間を惜しんでうまいものは食べられないと、庄一は考えていた。

野菜づくりと同じだ。化学肥料や農薬をたくさん使った促成野菜は、虫も食べないものだ。有機肥料をできるだけ多く畑に入れて、草ひきや虫とりをこまめにするほかない。手間暇かけないと、おいしい野菜、安全な野菜はできない。虫も食わないような野菜を食べてはいけない、というのが庄一の信念だった。

「ショウサン、ええな。夫婦とも元気で孫も生まれて」

叔母は自分の実家が平穩なのがうれしいのか、にっこり小さな子ども二人を見ていた。

「おばちゃん、来られる間はお墓参りしたってよ」

長姉のことばに、叔母は「ありがと」と礼を言いながら、「もうあかんわ。来春の彼岸はお墓参りしたれんかもわからん。あんたら若いのやから、ずっと来たらなあかんぜ」

この「来たらなあかんぜ」というのが、どうにも愉快なことばだった。「墓参りに来た」とか、「お墓参りさせてもらう」のではなく、この家の「お墓参りにきてやっている」、「仏さんのためにお経をあげにきてやっている」というニュアンスだ。だから、料理をしてもてなすのが当然だという関係が成り立つ。

それからしばらく、鉢の具合、健康の話がつづいた。いつどちらが先に棺桶へ入っても不思議ではない、というようなもの言いだった。だが、彼女たちの食欲を見ていると、棺桶は遠いとおもった。もう腹いっぱいだといいなながら、時間をかけてたいらげていく。

妻と娘が茶碗蒸しを運んできた。下ごしらえは庄一がやっておいた。蓋をとる

とユズの香ばしい湯気が立ちのぼった。

「わたし、これ大好き」

サーコがそういってスプーンをもった。

ワタチモスキとりーこが言った。

のんびりとお彼岸の食事会ができるのは、いい老後をすごしているということだとおもいながら、後ろめたさをおぼえた。こういうことに充実感を覚えるのは照れくさく、さけてきたはずだ。子や孫たちが平穩な日々を送ってくれたらよいとおもっているが、それがすべてで絶対ではないというおもいが強かった。

秋の日暮れは速い。午後三時にはそろっとお墓参りをするのが恒例だった。墓は数百メートル離れた高台にある。

墓参りが終わって、女たちはお茶とお菓子で夕方までお喋りする。男たち四人は庄一の近くへ集まって夕方までお酒を飲む。孫たちはテレビのある居間のほうへ行く。夕方、仏前にお経を唱えて、彼岸参りの一日が終わる。

「おやじよ、原発のこと、あんなん嘘ばかりやろ」

ビールを飲みながら息子が訊ねた。庄

一は焼酎の湯割に変わっていた。弟も娘婿も息子の話に耳を傾けた。

「マスコミもおかしいで、(ヘアサズバ)のミノさんなんか、なにもわかっていないのに、言いたい放題でえか」

そういう息子に弟が、「ヘアンカー」も、へちんぶいぶい」もあかん」と言った。「だいたいワイドショーで、ニュースをおもしろおかしく扱うのは、あかんとおもうわ。しょうもないコメントイターばかりでな」と娘婿がつづけた。

ひと呼吸おいて、庄一が言った。

「政府の発表が嘘というより、わからないというのが実情だろうな。東電もなにもわかっていないね」

「除染やことできへんやろ」

弟が言った。「できない」と庄一は頷いた。息子も娘婿も頷いた。

「除染いうて、家の屋根や壁に水をかけているのを見てあきたわ。その水はどこへ流れていくのよなあ」

娘婿が息子にビールをつぎながら言った。

「事故が起きることなんか考えていなかったんや。建屋が爆発したあと、消防車で水をかけているの見て、こらあかんわとおもった。一般火災と同じやもん」

日本酒を飲んでいた弟が言った。

「そういえば、おとうさん、春から夏はいつもよく東京へ行っているけど、今年は何行つてえへんのとちがいますか」

娘婿が訊ねた。庄一は頷いた。

「原発事故が恐くて東京へ行かないのではなくて、地震がまだ落ち着いていないからや。阪神・淡路大震災のとき、余震は堪らなかつたからな」

「あのときはひどかつたんよ。うちは」

息子嫁が口を挟んだ。

嫁は当時中学生だつた。結納のとき、はじめて嫁の実家を訪ねたが、新築同然の家だつた。まだローンを払っているからしんどいと、嫁の父親が言った。魚がいい値で売れるからなんとかなつていと、結納の食事会のときに言った。

阪神・淡路大震災は立ち直りがはやかつた。島では翌日からでも、とり片づけをはじめられた。ライフラインと、物流

ラインの復旧がはやかつた。

東北の被害は巨大で、被害地域が阪神淡路よりもはるかに大きい。東北の復興はできるのかという疑問さえあつた。原発問題をかかえるだけに、いっそう深刻だと庄一はおもつていた。

チェルノブイリでは二十五年経つたいまも、メルトグウンを起こしたロスアンゼルス市郊外のサントラスザーナ野外研究所付近では、五十年経つたいまも放射能汚染がつづいている。

狭い日本では福島から逃げていくところがない。こういう狭い、小さな国に、原子力発電を五十基を越えてつくつた。まるで国家集団自殺を覚悟しているようにおもえた。

使用済み核燃料の最終処理方法をもたないまま、万一の事故の対処方法ももないまま、巨大な怪物をつくつた。時期がくれば廃炉にしなくてはならないのに、その方法もない。まるでトイレのない欠陥住宅のようなものだとおもつたが、欠陥住宅はゼネコンの得意技、原子力村の最大の利権者はゼネコン。庄一は苦虫を

つぶすほかなかつた。

原発の製造・建設をつづけようという勢力が、夏ごろからふたたび頭をもたげてきた。国内の建設はいまはむつかしいが、海外への原発の輸出はつづけるべきだというウルトラ論議が、まことしやかに語られ、マスコミが後押しをはじめた。この国がどのような方向へすすんでいくのか、庄一には予測できなかつた。

「おとうさん、大蕪、今年も大丈夫かな」

娘婿は冬の聖護院大根が好きだつた。大蕪を生でスライスして、鯉節を振りかけ、ポン酢味や醤油味で食べる。娘の帰宅が遅いとき、簡単にできる酒の肴だとしてよこんでいた。

「大根とホウレンソウ、リーコが大好きなのよねえ」息子嫁がリーコに言った。リーコがウンと頷いた。

庄一はこういう話を聞くと畑仕事に精をだしたくなる。子どもたちの連れ合いや孫たちもよるこぶかとおもうと、きつい畑仕事もたのしくなつた。

「やつぱり、百姓の子やなあ。シウサ

ンえらいわ」

叔母が庄一を見て言った。おれはこういうことに満足し、うれしくなるからな、薄情にはなれんのだよ、と庄一は妻の顔を見た。ふん、というように妻は顔をそむけた。

3

夕べ、川本三郎原作の映画「マイ・バック・ページ」をみた。全編にタバコの紫煙がたち籠めていた。酒とタバコの画面がつづく。

朝日系週刊誌で新左翼や全共闘を取材しつづけていた川本三郎が、自衛隊朝霞駐屯基地襲撃事件に関与したとして逮捕され、朝日新聞社を餓首された。ジャーナリストの道を選んだ川本の挫折だつた。それを自伝的に書いた。

あの時代といえば、お酒とタバコだというように、やたらとその場面が映つたタバコの煙は、あたかも先のみえない時代状況を象徴しているかのようだった。

逃走中の東大全共闘議長、山本義隆を

日比谷公園の全国全共闘集会へひっぱり

だしたのは川本三郎だつた。あれは全共闘最後の大会だつた。五万人とも十万人ともいわれた集会で、庄一も妻も、遠巻きに集会を覗いていた。

突然壇上に男が現れ、前のほうからどよめきが起こつた。山本議長だとわかるもつて、そういう意味合いのことばで演説をはじめたと、庄一はおもつていた。

「わたしは今日逮捕されます。その前に諸君と連帯の挨拶をしたい」、マイクをもつて、そういう意味合いのことばで演説をはじめたと、庄一はおもつていた。

山本義隆らしい人物が日比谷公園の、野外音楽堂らしい裏側から入る場面が映つた。その場面には制服・私服の警官が二十人ほどと、集会に参加している数十人の姿が映つただけで、大会の映像はなかつた。

あの大会の熱気を再現しなくては、川本三郎の意味は伝わらない。川本三郎が時代にかかわつた最大のことではないか。そういうおもいを、妻に言った。

「そうだよ、あの大会を再現しない

とね」と、妻も同感だつたようだ。

俳優はよかつた。自衛隊襲撃事件を起こした首謀者の日大生を松山ケンイチが週刊誌記者の川本三郎を妻夫木聡が演じた。存在感があつた。だが、幕切れがいかにともしがたかつた。「生きていければいいよ」という、旧知の居酒屋のあるじに言われた妻夫木が、はらはらと涙を流して終わる。

「泣いちゃいけないでしょう」と、映画が終わつたとき、庄一と妻はほとんど同時に発した。

それから庄一と妻はしばらくお酒を飲んだ。駄目だね、と愚痴りながら。妻の矛先がだんだん庄一に向いてきた。

「あの時代をともに書いた人はいないね。ヒナタさんが言っていたじゃない。シウサンが書けて」

期待していた「マイ・バック・ページ」が、おもいのほか物足りないものだった。その不満が庄一へ向けられた。

六十年代後半から七十年までの数年間、若者がフアナティックな時代だつた。若い活動家たちが庄一の周辺にもいたが、

庄一は距離をおいていた。自分のやるべきことは、別のところにあるとおもっていた。

アルバイトに追われ、時間の確保はなかなかできなかった。だが、なんとか時間を捻出しては、反故の紙切れを部屋じゅうに散乱させ、ひっそりにメモをとった。

小説でもなく詩でもなく、ことばの羅列だった。あの時代を描くには、状況にかわっていない庄一には無理だった。

「あと何年生きられるとおもっているの。落ち着いて家にはいないじゃないの」

妻の矛先は庄一の日常へと向いてきた。庄一に弁解の余地はなかった。いろいろな会に顔を出し、地域の役もつぎつぎにまわってきた。静かな時間はなかった。

「農民一揆をどうするのよ」

妻は咎めるように庄一に言った。

江戸時代に大きな農民一揆が島であった。これを徹底して調べて書くという仕事は、ここ数年立ち往生していた。

「すこしは覚悟を決めたら？ このままでは死ねないよ」

——だから、もうすこし長生きするよ、

とは言えなかった。いつお迎えがきても当然の齢になった。いままで元気に生きてこられたのが不思議なくらいだ。

「お彼岸なんかも、もつと簡単にしたら。仕出しをとるとか」

夕べのことだった。

「ショウサン、天麩羅、おしかったわ。

上手やなあ」

女たちはコーヒーから日本茶が変わっていた。叔母が庄一に声をかけた。女たちが頷いた。

「ショウサン一人で揚げたの？」

叔母が感心して訊ねた。

「器用やなあ。来年の春もショウサンの料理をたのしみに来るわ」

「来たつてよ。叔父叔母は、おばちゃん一人になってしもうたからな」

庄一は大きな声で叔母に言った。妻は反応を示さなかった。

「お墓参りは大勢で参ったらんと、仏さんがさみしがるからなあ」

「薩摩芋、おいしかった。もうとれたか」

次姉が訊ねた。次姉は農家に嫁いでいた。庄一が頷くと、「早いな」と言った。叔母の家もまだだと言った。

「一株だけ掘ったんや。おばちゃん、薩摩芋もつて帰るか。掘ってくるぜ」

「ありがとよ、手間やなあ」

叔母は遠慮をしなかった。

庄一はすぐに立ちあがった。通り門の長屋の倉庫から鍬と籠をもって、畑へ歩いて行った。外はまだ明るかった。

畑で二株掘って長屋にもどった。形のいいところを六つ、七つ選んでビニール袋に入れ、倉庫にたくさんある南瓜を二個、別の袋に入れた。

女たちの喋りの声、笑い声がよく外へ聞こえた。男たちの酔いがまわった声も聞こえた。秋の陽が傾きかけていたが、まだ陽ざしはあたたかかった。

サーコとリーコの、きやつきやという遊び声も聞こえた。庄一は孫の声に耳を澄ました。雀のチツチという鳴き声が、庭木のほうから聞こえてきた。

(抄出 北原文雄)